

シンポジウム

すぐれた授業は社会科学力を保障しているか

意見

生き方を教えるのではなく、生き方を自分で 選択する力をつける授業を

桑原 敏典

社会科でなすべきことは、特定の人物の生き方に共感させ、その生き方をわがものとさせることではない。多様な生き方があることを前提とし、子供が、自分に合った生き方を自ら合理的に選択できるようにすることである。そのために社会科が果たすべきことは、棚橋氏が述べられているように、子供に社会をわからせることであり、社会を捉えるために必要な見方考え方を身に付けさせることである。指導案一の授業は、この原理を踏み外しており、自分たちの住む社会を捉えさせられないものとなっている。

指導案一から、子供に獲得させたい見方考え方を取り出すと、「支配する人(殿様)やその協力者(周郎)は人々の暮らしを良くしたいという願いや思いを持っており、その努力や工夫によって人々の生活は改善されてきた」となる。これは、社会はこうあつて欲しい、あるいは子供にこのように生きて欲しいという教師の願望や期待から設定されている。そのため、科学性は低く適用できる事象も限られた知識であり、現実の社会を説明するうえで役立つものとは言えない。

一方、棚橋氏が考案した指導案二が

ら読み取れるのは、「社会全体の経済の仕組みが変化するならば、人々の生活を支える産業の種類も変化する」という見方考え方である。授業では、これを高松藩の財政状況を示す資料や『広益国産考』などの資料(事実)に基づいて確かめながら獲得させている。この知識は、歴史学研究成果に基づいており、適用範囲が広く、異なる時代の、異なる社会を捉える際にも役立つ。それは、子供に現実の社会の仕組みや構造を把握させ、そこでいかに生きるべきかを考える手がかりを与えてくれる。

小学校社会科では、子供の生き方の指導からはもつと引き下がり、社会を願望や期待に基づいて捉えさせるのではなく、科学の成果に基づいて冷静に合理的に捉える力を育成すべきである。棚橋氏によって改善された授業は、このねらいを達成し得るものである。

△岡山大学教育学部助教授△

シンポジウム

すぐれた授業は社会科学力を保障しているか

意見

知的好奇心を促す構造的な授業こそ

岩下 修

指導案一の授業は、棚橋氏が指摘されるように、社会科授業というより、道徳授業であると私も思う。

棚橋氏の次の主張にも、大筋においては、賛成である。

「子どもたちに『学問的あるいは知的な関心を持って問題を真剣に考え』させる学習、子どもたちの『知的好奇心を高めていく』学習こそが学力を保障する社会科学学習となりうる」

ただし、「学問的関心」というのが、分からない。文脈から言うと、関心を持つのは、子どものようだ。子どもが持つ「学問的関心」とは、どんな

関心を言うのだろうか。

問題は、指導案二の授業が、棚橋氏の言われるような「学力を保障する社会科授業」になっているかだ。

私は、この指導案で「知的好奇心」を高める授業をする自信がない。

①メインの学習課題も二つのサブの学習課題も「確認する」となっているが、具体的にはどうするのが、わからない。発問のように、言葉で問かけるのか。

②指導案では、一問一答式の発問(指示がないため子どもの活動が見えにくい)が続くが、この形で全員の知的好奇

心と思考を促すことができるか。

③教師の説明や補足にかなりの時間がかかりそう。しかも、四年生には、理解できにくい用語がたくさん登場しそうである。

④最後に示すメイン課題の内容が、冒頭のものとは変わっている。メイン課題が違っているのだろうか。

⑤この指導案は、一時間の授業過程を示したように見える。一時間では、とても、時間が足りない。

結論から言うと、この指導案は、子どもたちの知的好奇心を喚起するような構造になっていない。

人物の生き方の授業でなく、社会の変化をわからせたいという願いには、共感できるが、その願いを具体化する授業構造になっていない。

私なら、メインの学習課題を、本授業の主発問にして、授業を行う。

△愛知県名古屋市長六郷北小学校△